

# 看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

## 第4章

### 〈出産にまつわる文化〉

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター  
Center for the Study of Communication-Design, CSCD  
池田 光穂  
IKEDA Mitsuho

1

## 生殖にかんする観念

- 【後成説】アリストテレスは、血液から「スペルマ」が作られて、それが男では精液となり、女では月経となると主張。ガレノスは、2世紀にヒポクラテスの理論を発展させて、精液は「生殖に伴う快樂」のゆえに男女から作られたものであり、男女の「シーメンス」（種液）が混じり合って生命が誕生するとした。

2

## 前成説

- 子宮にこそ生命の源である卵が存在し、精子は卵を成長させるための必須のエネルギーであると主張するもの。これに類似した【精子論】とは、この時期に発明された顕微鏡を使うと精液中に「生物が発見された」ことから、精液のなかの「精虫」が人間の原型をしているという主張。

3

## 子供が親に似ることとは？

- メラネシアのトロブリアンド島では、人びとは性交が出産を引き起こすものであることを認めますが、親子間で顔貌が似てくることは、むしろ相互の「霊的な紐帯」であると人びとは主張

4

## 出産という文化

- 人間の出産の基本的な原則とは、生物学的事実である以上に高度にそれが文化的に形づくられていること
- 出産は女性が担うという生物学的事実（性の普遍的非対称性）と、全世界の民族の大多数の社会において、なぜ主要な社会で女性が男性に比べて劣位と見なされてきたのか、ということに関連づけて考察する

5

## 分娩姿勢

- 妊婦の姿勢には仰臥、横臥、膝まづく、座位、立位、横に渡した棒などにぶら下がる、などがある。
- 多くの伝統社会では座位が一般的です。それゆえに立位での出産などは非常に奇異なものとして注目
- 近代医療における産科学では、仰臥（正確には専用に作られた分娩台で妊婦はあたかも宙に浮いたようになっているが）で行い、このことが社会で当然のことと認められています。生物医学的に有意な根拠はとくに見つからず、分娩助産に便利のためという理由がその真相だが、これは伝統社会的概念からみると「異常」（比較：後背位が一般的な社会では、性行為の「正常位」は「宣教師スタイル」として異常視されたことを思い起こそう）

6

## 出産のスタイルの考察は重要

- 近代医療が導入されつつある伝統的な社会においては、座産は前近代のシンボルであり、伝統的な産婆でさえ座産よりも仰臥産で介助する傾向が生じています。ところが出産を近代医療から「産みの主体」である女性とその家族に取り戻す自然分娩運動（後述）がすすめる出産姿勢の中には、座産あるいは背後に介助者をつけた立産、ときには水中での座産などみられ、近代出産のシンボルである仰臥産を連想させないものが多いようです。近代医療にも座産の有効性を見直す理論が1970年代末以降になって登場しましたが、それは「伝統的な出産」の見直しとフェミニズム出産運動の影響を少なからず受けています。

7

## 出産行為の隔離

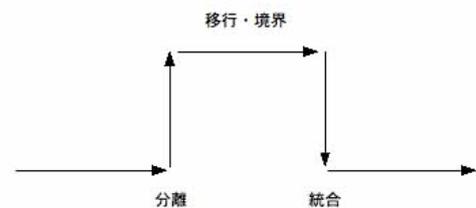
- 日本のいくつかの村落部では、明治時代中期までは産小屋という総称で呼ばれる出産のための小屋に隔離されて行われました。産小屋という隔離のための特別な小屋ないしは家屋で出産する民族はかなり多く、太平洋のマルケサス諸島、タヒチ、ハワイ、ニューギニアのアラペシュ、中央アメリカのインディヘナなどが知られています。分娩室も「隔離」の一種。

8

## なぜ出産は隠されるのか？

- 出産が程度の差こそあれ隔離した環境でなされることへの主要な解釈とは、それが出血を伴う不浄つまりケガレ（穢れ）と考えられて、潜在的に危険な力を持ったものと見なされており、人々がそれを避けたり統御できないものとして畏れているのだとするものです。実際、日本では死者に関する「黒不浄」と月経や出産に伴う「赤不浄」はケガレの主要なものとしてされていました。ヒンドゥー教の神インドラ、釈迦、帝王切開の語源になったと言われているローマ皇帝カエサルなどは、産道からではなく母親のわき腹から、不浄な「血」（その中には後産である胎盤も含まれる）を伴わずに生まれたと説明されることは、聖なるものとしての神や英雄であるという人々の根拠づけに役立っていると言えます。

9



ファン＝ジェネップの通過儀礼の理論とリーチ  
(1976)の図式的関係

## 通過儀礼 rite of passage

10

## 出産の通過儀礼

- 安産祈願の戌帯を腹部にまわす帯祝いを行うと「忌みの生活」に入るといわれます。妊婦が使う火と家族が使う火が区別され、特定の食べ物の食物禁忌もあります。（通過儀礼において）日常生活から「分離」が行われるのです。その後の社会からの引き籠りは、産婦、新生児、父親、親族、そしてときには共同体でさえ巻き込んだものであったといえます。ここで人々は、禁忌を守ったり、決められた儀礼を遂行しながらときを待つのであり、それは先に指摘した通過儀礼の「移行」の時期にもなっています。初宮参りが行われ、子どもは名実ともに人間界の仲間入りを完了し、期間の差こそあれ出産に関与した人々もやがて通常の社会生活に戻っていきます。むろん夫婦は忌み明けを完了して子どもの親として新しく社会的に認知されていくことは言うまでもありません。通過儀礼における「統合」が完了します。

11

## 産婆・ミッドワイフ・助産婦

- 分娩は妊婦1人だけで行うことが慣習化している社会と、ある種の介助者が呼ばれる社会があります。後者の介助者はふつう産婆と呼ばれており、ほとんどの社会において産婆は女性です。近代社会では西洋医学の訓練を組織的に受けた産婆を「助産婦」と呼んでいます。それを英語ではともに midwife と呼びますが、世界保健機関（WHO）の推定によると、全世界では6から8割の出産は伝統的な産婆によるものと言われています。

12

## 擬娩（ぎべん）

- 民族学や文化人類学あるいは歴史学では、擬娩は「鳥の抱卵」を意味するフランス語の古語であるクーバード（couvade）と呼ばれてきました。擬娩は妊娠や産褥を含む広義の「出産」を、伝統社会では夫婦の共同の作業であるとみなし、そのような命名を行ったようです。女のみならず男が出産の際に「苦しむ」（あるいは、そのような「振り」をする）「未開人」の「奇習」として長いあいだ理解されていました

13

## 避妊・墮胎・嬰兒殺し

- 出産は子孫を後世に残していく作業の一環（すなわち生殖）であり、時間的には、それに次いで育児が待ち受けています。出産には性交が必要ですが、性交にとって出産は必須ではありません。人間の性行為には文化的にさまざまに意味づけをされて、単なる生殖行為とは見なされない側面が多いことは周知の事実のとおりです。避妊、墮胎、嬰兒殺しは多くの社会において知られており、「生殖としての出産」が性行為との関連の中でどのような位置づけをされているかを知る里程標となります。

14

## 出産の医療化

- 日本では施設内出生、すなわち病院、診療所、助産所における出生の割合が、1950年では全国で5パーセントに満たなかったのが、60年では5割、70年では96%になり、85年ではほぼ100%にまでいたったからです。同年では全出生に対する医師の立会いがあったものをも79.2%であり、現在の「出産の風景」には医師があたりまえ登場人物となりました

15

## 日本の産科医の9割は男性

- 「産みの性」と「産みを見守る性」がおしなべて女性であった伝統社会とは著しく異なった雰囲気をかもしだしていると言えるでしょう。日本の病院では女性の「助産婦」が医師を援助しているとは言え、男性の医師に対して身体的侵襲感を抱いている女性は多いという報告があります。

16

## 脱医療化あるいは代替化

- 近代医療における出産に対して異議申し立てを行なったのは、1960年代末から急速に広がった女性解放運動でした。他方、今世紀初頭にイギリスで開発された「精神予防性無痛分娩」とそれを洗練させたフランスのラマーズ法が「自然分娩」（麻酔や切開などの人工的な介入を極力さけようとする出産）として開発されていきました。米国や日本の自然分娩運動の推進者たちは、ラマーズ法における男性、その多くは配偶者、が出産に立ち会うことを歓迎し、出産を男女で分かち合う重要性を主張したと言われています。

17